HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第一部　通史.　第四編　キャンパスの変遷.　第七章　函館キャンパスの変遷
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 302-305
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28169
Type	departmental bulletin paper
File Information	4(7)_302.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第七章　函館キャンパスの変遷

一九〇七年の設置（設置当初は札幌農学校水産学科、東北帝国大学農科大学水産学科を経て、一八年に北海道帝国大学附属水産専門部）以来、日本唯一の水産高等教育機関であった附属水産専門部では、二三年頃から水産学発展のためには水産学部への再昇格、あるいは水産専門部の独立および高等水産学校の設置が必要であるとの意見が教官や卒業生の間から出され、総長佐藤昌介や文部省への働きかけがなされた。大学当局は当時、農学部の拡充と理学部の創設に専心していたため水産学部の設置には消極的であったが、文部省では水産専門部としての独立を審議し、二九年の帝国議会で函館に高等水産学校の設置を決定、附属水産専門部を独立し移転することになった。当初の予定では二九～三一年の三カ年事業として予算が組まれ、さらに函館市が二万坪の敷地と二五万円の寄付を申し出たため函館市での設立を決定したが、昭和恐慌と世界恐慌による経済的な不安定などが原因で、高等水産学校の開設は延期されることとなった。このような紆余曲折を経て、三五年四月、附属水産専門部は廃止、新たに漁撈、養殖、製造の三学科からなる函館高等水産学校が開校された。

本章では、函館キャンパスの変遷について、『北大水産学部七十五年史』と『北海道大学所属国有財産沿革』（十二冊の内其十一）を基礎資料に概観する。

第一節　戦前の函館キャンパス――函館高等水産学校から函館水産専門学校――

函館キャンパスにおける施設の建築工事着工は、開校の二年前の一九三三年九月に始まる。函館市の寄付による

鉄筋コンクリート造二階建ての化学細菌学実験室（p.a.229）、養殖学動物学実験室、養魚用温室などで、三四年十月に竣工している。これより少し遅れて翌三五年三月には木造二階建ての本館ならびに講堂（p.a.227）、図書館、銃剣道場・生徒控所・銃器室、汽罐室・変電室が竣工し、寄宿舎を除いて五月一日の開校への準備はほぼ整った。これより遡る同年一月七日に函館市から寄贈された土地は、校舎敷地（ほぼ現在地）一万五〇四〇坪五四二、隣接する網干場（現在地）三〇八一坪五六二、函館市弁天町の臨海実験場敷地五〇〇坪五三であった。開校式の式辞で校長佐々茂雄は「この地（函館、引用者注）に創設された理由と経過」として「本校の敷地と建物の一半は函館市民の奉仕による所」と述べている。前年に函館を襲った未曾有の大火を考えると、いかに函館市民が高等水産学校の誘致を望んでいたかを窺い知れる。しかしながら、初めて函館キャンパスへ足を踏み入れた学生達が持った印象は、緑など全くない殺風景な茫漠たる砂原の中に建つ新校舎であったという。

開校から約一カ月遅れて五月二十九日に寄宿舎（北晨寮）（p.a.233）が竣工した。翌一九三六年三月に北半分を焼失するが、北水同窓会（水産学部同窓会）の寄付により、同年十一月に再建された。また、同年四月には戦前期函館キャンパスで最も規模の大きい漁撈製造実習工場（p.a.230）が竣工している。

網干場（p.a.441）は、キャンパスから上磯街道（国道二二八号）を越えてすぐの上磯町字七飯浜にある。漁業実習用の船艇や網を保管する倉庫として、一九三六年に網倉（木造二階建一部平家）と油庫（鉄筋コンクリート造平家）各一棟、四一年には艇庫二棟（いずれも木造平家）が建てられた。いずれも、現役施設として利用されている。

ところで、構内には養魚温室裏手に土俵（p.a.236）があった。相撲大会は、一九〇九年二月二十一日のオコック会（北水同窓会の源流）創立記念日に札幌キャンパスの予科道場で行なわれて以来の伝統で、その後の新入生歓迎会として定着したという。札幌キャンパス時代にも水産専門部水産学実習室の裏手に土俵があった（p.a.066）。かつて水産と相撲には深い縁があった。

「真に水産業の実を揚げる有為の人材、ことに国際漁場に於いて漁業船隊を統率し、科学的に指導啓発の任に当る優秀な海上技術者を要望することを切なる」（『親潮』七八号、一九四一年）理念により、四一年三月三十一日、遠洋漁業科が設置され、四月二十六日入学式が行なわれた。函館市の川畑孫市は遠洋漁業科の設置に共感し、私財一五万円を寄付して遠洋漁業科教室（p.a.237）ならびに訓育寮（遠洋漁業科寄宿舎、p.a.228）の二棟を建築し、さらに内容充実費として、一〇万円の寄付を申し込んだ。特に遠洋漁業科教室は寄付者にちなみ「川畑講堂」と呼ばれた。戦中には、東京市の五十嵐与助の寄付により、滑空機（グライダー）とその格納庫が寄贈された。

一九四四年三月三十一日に、函館高等水産学校は函館水産専門学校へと改組された。間もなく終戦を迎え、四五年十月から米軍による北海道進駐が始まる。九月三十日進駐軍司令官から、十月三日正午までに全校を清潔の状態において明け渡すよう命令が下る。移転先は函館市内の東川国民学校。大火復興建築の鉄筋コンクリート造であるが、狭くて教室数も少なく、かつ食糧事情も悪かったので、生徒たちは勉強どころではなかったという。

一九四六年二月七日、進駐軍の失火により、新築間もない川畑講堂は焼失した。翌年一月、突然、校舎返還の通告を受けるが、冬期休暇中であったため、函館市内在住の生徒を集めて移転作業を行った。わずか一〇日で移転を完了させたが、内部の設備は著しく破損していた。また、貴重な標本類の多くが、接収・移転の混乱の中、散逸した。

一九四九年三月二十五日、遠洋漁業科教室（p.a.239）が再建され、以前と同様に川畑講堂と呼ばれた。

第二節　戦後の函館キャンパス――北海道大学水産学部――

一九四九年五月三十一日、新制北海道大学成立と同時に、水産技能教育に大きな役割を果たしてきた函館水産専門学校と、水産学研究を目的とした農学部水産学科（札幌において一九四〇年に設置）を合同した水産学部が新設

された。札幌キャンパスにあった水産学部は五三年十二月一日までに函館移転を完了させ、五四年三月三十一日をもって函館水産専門学校は廃止となった。

一九五七年十月六日、水産学部五〇年式典が挙行された。この時の寄付金により、翌五八年二月三日に標本室(p.a.240)が建てられた。現在の水産資料館の旧館部分である。六〇年には大洋漁業株式会社の寄付により、北洋水産研究館(p.a.248)が建てられた。

函館キャンパスに移転以後、わずか二十数年しか経ていない各施設であるが、大半の施設が木造だったこともあり、また進駐軍の接収が建物の老朽化を加速度的に進行させていた。一九六五年、キャンパスとは少し離れたところに新北晨寮(p.a.567)が建設される。七〇年以降、順次老朽建物の更新が行なわれ、七〇～七一年には鉄筋コンクリート造六階建ての管理研究棟(p.a.243)ならびに同二階建ての講義棟が旧北晨寮跡地にL字型に配置され建設される。戦前に本館と川畑講堂がL字型に並んだ様子のアナロジーとれないこともない。七二年には鉄筋コンクリート造二階建ての図書館(p.a.250)が建ち、その後八一年にかけて実験棟・研究棟が鉄筋コンクリート造で次々と更新されていく。およそこの時点で、ほぼ現在と同様のキャンパスの骨格ができあがった。

一九八〇年代に入ると、キャンパスの整備は実験・研究施設から、福利厚生・環境整備へとシフトしていく。七八年に福利厚生会館(北大生協水産学部店、p.a.252)、体育館(p.a.245)を皮切りに、八二年には課外活動施設(サークル会館)、翌八三年には水産学部創基七十五周年記念事業後援会の寄付により水産資料館(p.a.242)が増築された。八八年には、函館キャンパス内に現存する唯一の戦前期の遺構である講堂の改修工事が行なわれる。九四年には、学内環境整備の一環で親水公園を併設したプロムナードが造成された(p.a.251)。キャンパス移転当初の茫漠とした風景は、今はもうない。緑豊かとまでは言えないが、教職員や学生達が憩えるキャンパスがようやく姿を現し始めたところである。